

「わたしたちを導く星」

マタイによる福音書 2:1-12

2023年12月31日
野村 友美 師

<「信仰」というもの>

おはようございます。

早いもので、2023年も今日が最後の1日になりました。大晦日を礼拝で締めくくって、慌ただしくもあります。なかなか素敵なことだと思います。

過ぎ去ったこの1年間を振り返ると、いろんなことがありましたね。世界的な出来事としては、ガザのイスラム組織であるハマスとイスラエルとの間で、戦争が始まりました。一般の人たちも争いの真ただ中に置かれて、本当にたくさんの方が犠牲になってしまわれました。ガザとイスラエルだけじゃなくて、ウクライナとロシアの戦争も未だに終わりが見えてきません。

この呉教会でのことを言えば、今年はまさに激動の1年間だったと思います。52年間、呉教会を牧会してきてくださった前任牧師の松田基子先生が3月末で引退されて、私が新しく赴任してきました。お互いにほぼ「初めまして」で、呉のことも教会のことも皆さんのことも1から覚えなくてはいけない牧師を迎えて、手がかかって大変だったでしょう？本当に、皆さんが祈って助けてくださったこの9ヶ月、ありがとうございました。改めまして、これからもよろしく願いいたします。

今日ここにおられるみなさん一人一人にとっても、それぞれに嬉しいことや悲しいこと、びっくりすること、いろいろなことがあった1年間だったと思います。明日から始まる新しい1年にも、きっといろんなことが待っているはずです。何が起るのか、世界がどうなっていくのかは、誰にもわかりません。だから「この先こんなことがありますよ、あんなことが起こりますよ」と未来を具体的に教えてくれそうなものに、私たちはついつい惹きつけられる時があるでしょう。当たるも八卦と言いますから、たまたまそれが何かを言い当てるときもあるかもしれません。

でも私たちの人生に何が起きるか、どんなことが待っているかを全部知ること、教えてもらうことも、誰にもできないんです。何が待ち受けているかわからない明日に、私たちは1日1日踏み出していきます。

先が見えない暗がりの中で、それでも次の一步を踏み出すために、進むべき道を照らす光。

その光を見つめて歩くのが「信仰」というものではないでしょうか。

この先に何かあるのかは見えなくても、どう歩いていけばいいかを教えて導く光。

それが、私たちに与えられている「信仰」です。イエス様がお生まれになった時、一つの光が空に輝いたと聖書は伝えています。

<王様の誕生>

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか？私たちは遠い東の国で、その方を示す星を見たので、礼拝しに来ました。」

突然やって来た外国の学者たちは、イスラエルの王様ヘロデに質問しました。

ヘロデとその周りの人たちは、びっくりして言葉も出ません。新しい王様が生まれたなんて誰も知らなかったし、そんな星が現れたことだって誰も気が付きもしていなかったんです。

東の方の国から来た彼らは、占星術の学者でした。この時代の占星術の学者というのは、ただの占い師じゃなくて、どちらかというと天文学とか歴史の研究をしていたような人たちです。

夜空の星の動きや輝き具合を観察して、そこからいろいろな出来事を予測する、それが占星術の学者たちの仕事でした。毎日、毎晩、何かが起こるしを探して、彼らはじっと夜空の星を見つめていたのでしょう。そんな学者たちに神様は、ユダヤ人の国イスラエルで王様が誕生したことを教える不思議な星をお見せになりました。

どうやら新しいユダヤ人の王様は、ただの人じゃないらしい。自分たちもその特別な王様に会ってみたい、礼拝したい!とその星を見て、彼らは居ても立ってもいられなくなったようです。

生まれたばかりのユダヤの王様という手掛かりだけで、学者たちは遠路はるばる旅をしてエルサレムまでやって来ました。

イスラエルの首都エルサレムなら、ユダヤ人の王様の宮殿があるし、きっと新しい王様もそこにいるはずだ、と思ったんでしょう。

ユダヤ人の王様になるお方が生まれたでしょう? 私たちは星を見てそのことを知りました、という学者たちの言葉を聞いて不安になったのが、この時イスラエルを治めていたヘロデ王です。

当時のイスラエルは、ローマ帝国に支配されていました。ヘロデという人は、そのローマ帝国の力を頼って王様にしてもらってイスラエルの統治を任されていた人物です。

自分の知恵と力をふりしぼって王様の地位を手に入れた、そんなヘロデにしてみたら「新しく生まれたユダヤ人の王様」なんて、敵以外の何者でもありません。

イスラエルとは何の関係もないはずの学者たちが、人間の力じゃ動かしようもない星の光に導かれて、王様の誕生を知って訪ねてきた。

ということは、これは神様が関わっている、神様の力が働いている出来事だ。

生まれてきたのはきっと、昔の預言者たちが予告したメシア、救い主になるという、あの約束の王に違いない。そう気がついたヘロデは、さっそく聖書に詳しい祭司長や律法学者たちを集めて預言者たちが伝えた神様の約束の言葉を探させました。

救い主になる新しい王様を迎えるため、ではありません。自分がユダヤ人の王様で居続けるために、生まれたばかりのその救い主を今のうちに殺してしまおう、と決心したんです。いくらなんでも、神様が生まれさせた救い主を殺そうなんてヘロデって何て悪い人なんでしょう。いえ、確かにヘロデは決して性格が良い人ではなかったみたいですが、この時代の権力者としては、特別に極悪人というわけでもなかったらと思います。

ヘロデはとにかく自分を守りたくて、必死だったんです。イスラエルを支配したローマの権力者たちにペコペコして、ライバルを蹴倒して逆らう人

たちを踏みにじって、やっと手に入れた王様の座です。

もしこのまま新しい王様とやりに王座を渡してしまったら、自分は一体どうなるのか。

きっと今までやってきたことの仕返しをされて、蹴倒されて、踏みにじられてみじめな人生を送るしかなくなってしまう。そう思ったら、ヘロデは王様じゃなくなるのが怖くて怖くてたまらなかつたんでしょ。

だから神様がなさることなんか無視して、自分で自分を守ろうとして、ヘロデは必死で新しい王様のことを調べさせました。

ヘロデだけじゃなくて、エルサレムの人たちもみんな不安になったと福音書は伝えています。

もし本当に新しい王様が生まれたんだったら、これから大変なことになる。ヘロデがおとなしく王様の座を渡すとは思えないし、もしかしたらまたローマの軍隊が出てきて、エルサレムで争いが起きるかもしれない。ヘロデもエルサレムの人たちも「救い主が生まれたのか！」と喜ぶよりも先に「自分はこれからどうなるんだろう？」という不安で心がいっぱいになったんです。

ヘロデの命令で、祭司長たちや律法学者たちが預言者の言葉を調べて、どうやら約束の王様はベツレヘムの町で生まれるらしい、というところまでわかりました。さらに、その子がいま何歳ぐらいの子どもなのか確認するために、ヘロデは他の人たちに内緒で、星が現れた時期を学者たちに確かめました。救い主を殺そうとしているなんて知られたら、みんな怒って自分を殺そうとするかもしれないと思って、それもヘロデは怖かつたんで

しょう。私もそのお方を礼拝したいから、見つかったら詳しい居場所を教えてくれ。

ヘロデはそう言って、不安と怖さで真っ暗な心を隠しながら、学者たちを送り出しました。

<その星を道しるべに>

そんなヘロデの企みも、神様は学者たちを導く手段に変えられました。ヘロデが自分を守ろうとして必死に調べた情報と、夜空に輝く星の導きが合わさって、学者たちは無事にイエス様のところにたどり着きます。

ベツレヘムに向かった彼らは、星が止まった場所で赤ちゃんのイエス様と出会いました。

家の中でお母さんのマリアと一緒にいるイエス様を見て、学者たちはひれ伏して宝箱を開けて、黄金と乳香と没薬を贈り物として捧げました。

黄金、つまり金は、今でもかなり高価なものですよね。乳香と没薬も、やっぱりとても貴重で高価な香料と薬です。ちょっと普通のプレゼントのレベルじゃない、まさに王様にふさわしい贈り物でした。考えてみたら、これはすごく不思議なことだと思います。彼らが会いに来たのは、自分の国の王様じゃありません。自分たちとは特に関係ない「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」でした。でも学者たちは星を見て、これは自分たちにも関係があることだ、と確信して高価な贈り物を持ってはるばる会いに来たんです。

彼らを導く星が止まったのは、エルサレムの王宮じゃなくて、ベツレヘムのごく普通の家の上でした。そこにいたのはまだ王様にもなっていない、ただの赤ちゃんでした。この赤ちゃんがこれから

どうなるのか、どんな王様になって、自分たちに
どう関わるのか、まだ何もわかりません。

それでも学者たちは大喜びでひれ伏して、持って
きた贈り物を差し出しました。

彼らの上に輝いた星、神様が見せてくださった星
が、この東の国の占星術の学者たちに「希望」を
与えていたんです。

何が起こるのかはわからないけど、神様が私たち
に関わってくださる。神様がこれから私たち
に、何か素晴らしいことを見せてくださる。

そういう希望を示す星に導かれて、彼らはイエス
様に出会いました。

今、彼らの目の前にいるのはただの弱々しい赤
ちゃんです、でもこの子を通して、神様は何かを
引き起こそうとしておられる。ユダヤ人だけじゃ
なくて外国人の自分たちにも、すべての人に関わ
る大切なことがここから起ころうとしている。

そういう希望を受け取って、学者たちは自分たち
の国に帰って行きました。

ヘロデのところに行かないように、という神様の
導きは、今度は夢のお告げという形で学者たちに
伝えられます。彼らを導く星は、夜の空に輝く小
さな光だけじゃなくなりました。

この世界に与えられた新しい王様、イエス様の存
在が、昼も夜も変わらずに輝く、彼らの希望の星
になりました。

自分たちの国に帰った後、この学者たちがどん
な人生を生きたのかは何も伝えられていません。
それでも、不思議な星に導かれて救い主になる赤
ちゃんに出会ったことを彼らはずっと忘れな
かったでしょう。あの赤ちゃんを通して、神様が

これから何か素晴らしいことを引き起こされる。
それは自分たちにも、すべての人に関わる大切な
ことだ、という希望がこの学者たちの一生を照ら
す光になっただろうと思います。

いつの時代でも、どんな場所においても、希望の光
が必要じゃない人はいません。

悲しみ、不安、恐れ、怒り、絶望、そして命ある
ものには必ずやってくる死。

この世界を覆う暗闇に「私は関係ない」と言える
人は誰もいません。だから「私には救い主なんか
必要じゃない、希望なんかいらない」と言える人
も、誰もいないんです。

神様を無視して傷つけ合う私たちの、罪の責任を
身代わりに背負って十字架で死なれて、神様から
の愛を示してくださった救い主。

その死からよみがえられて、神様と一緒に生きる
永遠の命への道をすべての人に照らし出した、神
の国の王様。イエス様という存在は、私たちを神
様と一緒に生きる人生へと導く星です。

どんな暗闇の先でも、神様が必ず愛の出来事を起
こしてくださる。この希望を輝かせて、どんな暗
がりの中でも、私たちに歩くべき道を教える星の
光が、人となられた神様の独り子、私たちの救い
主です。

この星を道しるべに、迎える新しい一年も、私た
ちは目を上げて歩いて行きましょう。

どんなことに会っても、神様の愛が必ず私たち
を照らして導いてくださいます。

この希望を掲げて、何があるかわからない1年へ
とご一緒に踏み出してまいりましょう。

お祈りいたします。